



Support Our Kids New Zealand Program 2025 Report



January 2026
Support Our Kids Project



New Zealand Program 2025 Overview

プログラム概要

事前研修

2025年 9月24日 (水)	第1回事前研修(オンライン)
2025年10月10日 (金)	第2回事前研修(オンライン)
2025年10月17日 (金)	第3回事前研修(オンライン)
2025年10月26日 (日)	第4回事前研修(福島訪問: 双葉町・浪江町)
2025年10月31日 (金)	第5回事前研修(東京:SOK事務局)
2025年11月1・2日 (土/日)	第6回事前研修(GTFグリーンチャレンジデー in 新宿御苑)
2025年11月6日 (木)	第7回事前研修(オンライン)
2025年11月9日 (日)	第8回事前研修(オンライン)
2025年11月18日 (火)	第9回事前研修(オンライン)
2025年11月20日 (木)	出発式



NZ研修

2025年11月21日 (金) ~ 11月28日 (金)

滞在先

オークランド、ロトルア、クライストチャーチ

参加者

東日本大震災で被災経験のある福島・茨城県出身の大学生4名

実施プログラム

第51回日本ニュージーランド経済人会議(JNZBC)参加
 311震災プレゼンテーション
 現地企業訪問、NZユースとの交流
 クライストチャーチ市長表敬訪問、被災地訪問

プログラム協力

駐日ニュージーランド大使館、日本ニュージーランド経済人会議、
 愛の夢チャリティーコンサート、株式会社アークリンク、株式会社アイ・コーポレーション、
 いそ路募金会、株式会社伊藤園、オー・プロヴァンソー、カナルカフェ、株式会社
 サッポロ製麺、ショコラティエ・エリカ、住友林業株式会社、関彰商事株式会社、タリーズ
 コーヒージャパン株式会社、株式会社中央不動産鑑定所、東和工業株式会社、戸田建設
 株式会社、株式会社虎ノ門実業会館、日本郵船株式会社、ニュージーランド航空、
 ヒーローズエデュテイメント株式会社、株式会社マルチグループホールディングス
 三菱UFJ銀行、Salus Aviation
 その他、多くの個人の皆様のご寄付、Yahoo!オークションへのご参加によるご支援を頂いております。

訪問都市について

今回のプログラムは、ニュージーランドの3都市を訪問。

① オークランド

ニュージーランド最大の都市。食、音楽、ファッションなどエンターテインメントの充実ぶりも国内最大規模であり、最新情報の発信地。

② ロトルア

北島に位置する、地熱活動とマオリ文化が色濃く残ることで有名な観光地。
 今回の日本ニュージーランド経済人会議の開催地。2011年最初のSupport Our Kids NZ研修開催地。

③ クライストチャーチ

南島最大の都市。南島の文化、経済の中心地であるこの街には、国内各地からの空の便や鉄道、長距離バスが運行されており、名実ともに南島のゲートウェイとなっている。
 2011年カンタベリー地震の被災地。





事前研修（オンライン・福島訪問）

2025年9月24日から11月20日の出発まで、オンラインと対面を含めて10回の研修を実施致しました。オンライン研修では、オリエンテーションに続き、参加者の被災経験の共有、日本ニュージーランド経済人会議の内容に関する事前学習、震災プレゼンテーションの準備、GTFグリーンチャレンジデータベース運営の準備等を行いました。



Agenda ①振り返り：福島訪問>F

- ②経済人会議の事前学習：プレゼンテーション
自分が興味のあることについて調べたことを
5分以内でプレゼンする
- ③経済人会議セッション7について
私たちが伝えたい方向性を話し合う
- ④震災プレゼンテーションについて
現地を発表する震災プレゼンの方向性を決める
内容・形式
- ⑤その他：事務局連絡&質問タイム

Support Our Kids

オンライン研修



Support Our Kids名誉会長・日本ニュージーランド経済人会議ニュージーランド側委員長のイアン氏・節子夫人とオンラインで事前に対面致しました。



2025年10月26日(日)、事前研修として福島県双葉町「東日本大震災・原子力災害伝承館」と浪江町「請戸小学校」を訪問しました。東日本大震災の津波や原発事故の影響を資料を通して改めて学び、当時の自分達の経験を改めて整理しなおす貴重な機会となりました。また、実際に被災地に足を運ぶことで、浪江町の道の駅のにぎわいなど、復興の様子を肌で感じることも出来ました。



福島訪問



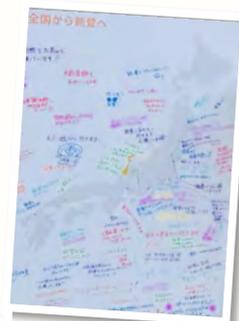
当日は福島民友新聞社に取材頂き、11月8日(土)に掲載されました。

事前研修（GTFグリーンチャレンジデー）・出発式

2025年11月1日(土)・2日(日)に開催された環境省共催の環境イベントGTFグリーンチャレンジデーin 新宿御苑にて、事前研修の一環として、Support Our Kidsブースの企画・運営をしました。ブースでは、防災ワークショップとパネル展示、福島やNZに関するアンケートを実施しました。海外の方も多く来場頂き、英語で積極的に福島の状態を伝える機会にもなりました。また、ニュージーランド大使館宮崎様をはじめ、多くの支援者の皆様にもお越し頂きました。沢山のSupport Our Kidsアルムナイもサポートし、SOK人気のチャリティ商品「とまと梅」も販売。能登への応援メッセージボードも完成しました



GTFグリーンチャレンジデー



皆さんにご協力頂いた応援メッセージは、能登空港に2025年12月いっぱい展示されました。



2025年11月20日(木)、駐日ニュージーランド大使館にて、出発式を執り行いました。ニュージーランド大使館 ガヤレン・ピジョン公使やエグゼクティブオフィサーの宮崎様、タリーズコーヒー ジャパン株式会社の小林様から激励の言葉を頂きました。2023,2024年にSupport Our Kids NZプログラムに参加したアルムナイも後輩達をサポートしました。参加者4名それぞれの目標とグループ目標も定めて出発いたしました。



出発式

出国前には、支援企業のタリーズコーヒー成田空港第2ターミナル店に訪問致しました。



現地での様子① オークランド研修



Salus Aviation訪問

最先端技術を駆使したヘリコプターの製造過程を見学させて頂き、コックピットにも乗せていただきました。



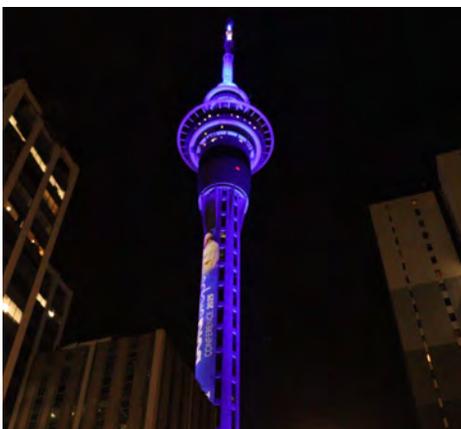
MUFG Bank訪問

オークランド支店の皆様と交流する機会を頂き、震災プレゼンテーションも実施しました。



オールブラックス体験

ニュージーランドの国技であるラグビーの体験型施設を訪問しました。



オークランド市内散策





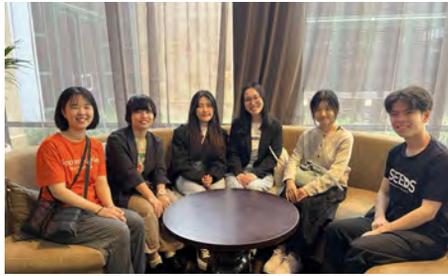
現地での様子② ロトルア研修

2025年11月22日(土) 日本ニュージーランド経済人会議のニュージーランドと日本側両委員長及び事務局の皆様、そして若者代表として一緒に参加するユース達と交流会を実施致しました。

会議の前に顔合わせが出来、ニュージーランドのことについて教えて頂いたり、お互いの将来について語り合ったりと、予定時間を超えて楽しい交流の場となりました。ご支援頂いた住友林業株式会社の皆様や日本ニュージーランド経済人会議事務局の皆様とも直接お話しできる貴重な機会となりました。



JNZBC事務局 & ユース交流会



住友林業株式会社 市川会長 (JNZBC日本側委員長)にもご参加頂きました。



2025年11月23日(日) 午前、マオリ文化と地熱活動が融合したニュージーランドの代表的な観光地であるTE PUIAを訪問しました。

TE PUIAでは、火山活動で吹き上がる間欠泉やニュージーランドの国鳥キーウィ、マオリ文化を継承する織物や木彫りの芸術学校を見学しました。



TE PUIA訪問



若返りという間欠泉のしぶきを沢山浴びました！



現地での様子③ 日本ニュージーランド経済人会議

Support Our Kidsの名誉会長であるイアン・ケネディ氏がニュージーランド側委員長を務める「日本ニュージーランド経済委員会」と連携し、毎年11月に開催されている国際会議「日本ニュージーランド経済人会議」に参加。両国を代表するビジネスパーソンが一堂に集い、両国の発展や経済・文化について、多岐に渡るセッションが繰り広げられる大変貴重な場に、若者代表として特別参加させていただきました。また、運営事務局の一員として、受付や誘導等を一部サポートさせていただきました。



歓迎レセプション



在ニュージーランド日本国大使館
大澤誠大使と



在オークランド日本総領事館
松居総領事と



講演・トークセッション

「次世代による未来へのセッション」に登壇させていただきました。

また、昨年参加した学生達が提言した「東北を本会議の開催地として検討して頂きたい」が実現し、2026年の本会議は仙台で開催されることが発表されました。



誘導のお手伝い



JNZBC事務局の皆様と



弊会公式SNSで発信した現地報告や事後レポート等から、JNZBCに関する感想(一部抜粋)です。

会議全体とセッションに登壇した感想：須田日菜子

事前資料を見て、セッションのあり方が大学の講義のように感じられたため、初めはこの会議が対面である意味はどこにあるのかを考えながら参加していました。しかし、レセプションパーティーや晩餐会を通して、どんどん生まれる縁の結びつきを目の前で見ていると、ビジネスの世界はいろいろな在り方があるし、結局こうした昔ながらの**つながりが大事**なのだと感じさせられました。ニュージーランドの方々は、少ない人口だからこそ人と人のつながりを大切にします。だからこの気づきは、ほかの国との経済人会議ではなく、ニュージーランドという国との関係の中でだからこそ強く感じた学びのようにも思います。また、**日本では会えない人たちに、この国だから出会えた**、という逆説的な事実にも、貴重な機会だったことを何度も再確認しました。

セッション7「次世代のセッション」では、SOK、そして日本側の代表として登壇させていただきました。コーヒープレイクや晩餐会では、様々な企業のみなさまに「楽しみにしているよ！」とお声がけいただき、今回**参加を認めてくださったことへの感謝**も乗せて、このセッションで期待にお応えしたいと思ってきました。前日にはメンバーたちと遅くまで調べものと話し合いを重ね、防災の大切さ等、言いたいことをまとめて準備をしました。それでも、本番いざ登壇するときにその場での会話を**楽しむつもりでパネルディスカッションに臨めたのは、その時に生まれるものの良さ**を目にする二日間があったからです。これからも、その場の空気に任せてみることの可能性を自分のなかにもってきたいと思っています。

ウェルカムレセプションと会議を通じたNZユースとの交流について：小濃竜馬

ウェルカムレセプションでは、省庁、名だたる企業、士業、経営者の方々など、普段なかなか会えない方々ばかりで、本当に**貴重な機会をいただけたことに感謝の気持ち**でいっぱいでした。また、SOKの活動を支援してくださる皆様に**直接お礼を伝えられたこと**も、とても嬉しかったです。第一線で活躍されている方々の話はどれも刺激的で、「**自分もいつかこういう大人になりたい**」と強く思いました。一方で、自分がそこに届くのか不安になる瞬間もありましたが、松居総領事からの「**ここにいるだけで殻を突き破っているよ**」という言葉に背中を押され、**挑戦する姿勢を大切に**したいと改めて思いました。学生としてこの場に立てること、関わってくださるすべての方々への感謝を胸に全力で臨みます。

また、経済人会議の若者代表であるNZユースの方々との交流を通じて、国際会議に積極的に参加している方や、剣道でNZチャンピオンを獲得しながら学業やインターンシップを両立させている方、すでに法律の専門分野で働いている方など、**多様な挑戦を続ける同世代の姿に強い刺激**を受けました。NZのユースたちが日本語と英語を自然に使い分けながら意見を交わす姿を目の当たりにし、自分も国際的な場で考えを伝えられるよう、語学力を磨き続ける必要性も強く感じました。

こうした体験を通じて、多様な文化や人との出会いが大きな刺激となり、自分自身もさらに成長していきたいと強く思うようになりました。今後も、異なる価値観に触れる機会を積極的に求めながら学び続け、自分の視野や行動の幅を広げていきたいと考えています。

会議1日目を終えた感想：梶原光

朝は誘導の運営サポートからスタート。まず、大澤大使からニュージーランドのエネルギー事情について、松居総領事からはマオリが社会・経済に与えている影響についてお話をいただきました。とくに、ニュージーランドが国際投資の拡大を積極的に進めていること、そしてマオリ文化が経済全体に大きな力をもっているという点が印象的でした。また、スライドに登壇した政府関係者やリーダーの多くが女性だったことから、ニュージーランドではジェンダー平等が着実に進んでいると実感しました。これらは、経済人会議に臨むうえで重要な事前知識となりました！

経済人会議では、貿易、食糧、養殖、エネルギー、インフラなど、さまざまなテーマのセッションが行われました。日本で人気のプロテイン「SAVAS」に、ニュージーランド産のプロテインミルクが多く使われていることを知り、**日本とニュージーランドのつながり**を改めて感じました。また、日本はにんじんジュースの消費量が世界4位で、野菜ジュースが大好きな国なのだそうです。**ニュージーランド側から見た日本の姿がとても新鮮**でした！

経済人会議1日目が終わりと、晩餐会の前にはマオリの伝統的な儀式を見学しました。力強さと威厳に満ちた儀式から、マオリ文化が今も大切に受け継がれていることを深く感じました。晩餐会では多くの方とお話することができ、その言葉や表情から、**自分の仕事に誇り**を持っている姿がひしひしと伝わってきました。気づけば、たくさんの方に背中を押してもらっていました。

経済人会議は、場の雰囲気圧倒され、「**自分がここにいてよいのだろうか**」と不安な気持ちでスタートしました。しかし、そうした不安とは裏腹に、**多くの方が真摯に耳を傾け、温かく接してくださいました**。そのときいただいた言葉の数々は、時間が経った今もふと蘇ってきます。



現地での様子④ クライストチャーチ市内研修



クライストチャーチ市長 表敬訪問

フィル・メイジャー市長と復興について対談のお時間を頂きました。英語で震災プレゼンテーションも実施しました。



被災地訪問

紙の大聖堂、CTVビル跡地、メモリアルウォール、QUAKE CITY(地震に関する博物館)等を訪問しました。



支援者訪問

虎ノ門実業会館グループ 5つ星ホテル The Georgeにて、フェアウェルディナーを頂きました。



解散式

TULLY'S COFFEE様のご協力により、東京駅ヤエチカ店にて解散式を執り行いました。駐日ニュージーランド大使館 エグゼクティブオフィサー 宮崎様、タリーズコーヒージャパン株式会社 阿部様・宇根様・渡邊様にもご出席頂きました。また、Support Our Kidsアルムナイも運営をサポートしました。

日時 2025年11月28日（金）20時半～
場所 Tully's coffee東京駅ヤエチカ店
内容 参加者感想、ご来賓挨拶

参加者 事後レポート：大野香菜

私は Support Our Kids のプログラムに参加するまで、自分の震災経験を人に話したことがありませんでした。そんな私が、今回のプログラムを通じて、初めて自分の言葉で経験を伝えることができました。それは、一緒に過ごしたメンバーが同じ目線で震災当時を振り返ってくれたこと、そして SOK のスタッフの方々が何度も励ましてくださったおかげだと思います。まずは、周りのメンバーや SOK の活動に関わってくださった皆さんに、感謝を伝えたいです。ありがとうございました。

今回、三菱 UFJ 銀行オークランド支店、そしてクライストチャーチ市長への表敬訪問の場で、震災に関するプレゼンテーションを行いました。緊張しながらの発表でしたが、ニュージーランドの方々は目をまっすぐに見て真剣に話を聞いてくださり、その雰囲気の中で、私たちも自ずと「自分たちの言葉で伝えなければならない」と感じました。

三菱 UFJ 銀行での発表後には、社員の方々があたたかい言葉をたくさんかけてくださいました。ある社員の方が「あなたたちが自分たちの経験を話してくれたことで、私たちはとても勉強になったよ」と伝えてくださったのですが、その言葉は特に心に残っています。なぜなら、東北の復興のために何ができるのかを模索し、もどかしさを抱えていた私にとって、自分の経験を伝えることで周りの方々の考え方や生活に影響を与えられたという“第一歩”を実感できたからです。

私は自分の葛藤を押しつづさず、自分と向き合いながら言葉を選びました。そして、今も葛藤が残っていることを率直に伝えることができました。だからこそ、言語の違いはあっても、経験の中から見出した私たちの「強さ」を伝えることができたのではないかと考えています。事前研修では、発表を聞いてくださった方に「可哀想」と思われるのではなく、「希望や強さ」を感じてほしいと話していたので、それを達成することができてよかったです。

来年で東日本大震災から 15 年が経ちますが、この期間を長いと感じるでしょうか。それとも、あっという間だったと感じるでしょうか。GTF グリーンチャレンジデーでは、来場者の方々に震災に関するアンケートに答えていただきました。その回答の中には、東北の方の声として「まだ心の復興ができていないから、被災地の復興は完了していない」という意見が多くありました。また、実際に来場者の方々とお話する中で、今も多くの人の心に葛藤が残り続けていることを感じました。震災当時の状況は、一人ひとり全く異なっていました。東北が希望に向かって進んでいることは嬉しい一方で、まだ本当の意味での復興が完了していない部分があることも、忘れてはならないと感じています。

この研修に参加した私たちは、3.11 の記憶がある「最後の世代」といわれています。そのため、震災を知らない世代にも、自分たちの経験を伝えていく責任があります。将来は教壇に立ち、震災経験のない子どもたちに対しても、自身や周りの経験を積極的に伝えていきたいです。経験を自分事として語ることができるのは私の強みの一つですが、一つの立場から見た事実だけを語るのではなく、できる限り複数の視点をもって伝えていきたいと考えています。それは今回の研修を通して、それぞれの人に異なる立場や思いがあることを知ったからです。また、震災を遠い出来事にしないために、行事やイベントとしてだけでなく、日常的な場面や授業の中でも震災や防災について考える時間をつくっていきたいです。

今回の研修は、私にとって震災経験を伝える側としての第一歩でした。震災は、過去の出来事ではなく、今も多くの人の心の中に残り続けています。そして、震災経験を語ることは、過去を振り返るだけでなく、未来につなげる行動なのだ学びました。今回の研修を通して、自分の経験を語ることが、誰かの心に届き、考えるきっかけになるのだと実感できたからです。これからも震災の記憶と教訓を次の世代へつないでいく存在でいられるよう、常に関心を持ち続け、行動していきます。



GEKKAN NZ

NZ現地発の日本語生活総合情報フリーマガジン。
2026年夏号(1月9日発行)に、Support Our Kids ニュージーランドプログラムの様子を掲載頂きました。

日本とニュージーランド、次世代の架け橋 — Support Our Kids NZプログラム2025

2025年11月 ニュージーランド滞在レポート

■ Support Our Kids (SOK)とは

日本大震災や被災した子ども達の自立を多岐にわたる形で2011年に発足した、Support Our Kidsプロジェクト。NPO法人、交代の創設者 前理事 藤原 伸太郎 (故人) と、当時の在日ニュージーランド大使 イアン・マクドナルド 侯爵が、ニュージーランド政府をはじめとするニュージーランドや日本両国によって被災者支援に立ち上がりました。以来10年間の絆と大団圓の魂の物語。『グローバルな体験から得た気づきや学びを東北の復興に活かせるように』と、被災地の学生達に海外研修プログラムを提供してきました。

■ ニュージーランド滞りの様子

2025年のSupport Our Kids NZプログラムは、在日ニュージーランド大使館にて出発式が行われ、大学4名がオーストラランド、ロトルア、ワイカトの3都市を訪れました。

オーストラランドでは、現地企業 (Sales Aviation, MFG Kiosk) や A&B Blocks Experience 等地。また、毎年11月に開催される国際会議「日本ニュージーランド経済人会議」に、ロトルアにて参加。日本とニュージーランド両国を代表する経済人が集い、経済、貿易、投資のみならず、環境、エネルギー、安全保障、災害対策、宇宙探検など、広範なテーマについて議論がなされる場に、ニュージーランドのユースと共に日本の若者代表として参加しました。また、TEPUA®も取り、マオリ文化の体験やニュージーランドの自然で遊ばれました。

ワイカトでは、2011年日本大震災直前に、同じく大きな被害に遭ったカンタベリー地震の被災地を訪れました。ワイカトチャーター市長フルーモアー氏を表敬訪問し、両地域の復興について意見交換をしました。

学生達が行った農業プレゼンテーションの内容 (一部抜粋)

「日本大震災から15年が経とうとしている今、私たちは、震災を自身の記憶として伝えることができる最後の世代です。伝えることの重要性や、判断の遅れがどれほど危険につながるのかわかる数回も、次の世代に伝えていくことが、自分たちの世代に与えられた責任だと考えています。そして、この責任は日本国内だけでなく、海外でも共有し、連携を求めたいと思っています。」

「日本大震災から15年が経とうとしている今、私たちは、震災を自身の記憶として伝えることができる最後の世代です。伝えることの重要性や、判断の遅れがどれほど危険につながるのかわかる数回も、次の世代に伝えていくことが、自分たちの世代に与えられた責任だと考えています。そして、この責任は日本国内だけでなく、海外でも共有し、連携を求めたいと思っています。」

「私たちが事前研修で編纂された双葉町を訪れたとき、世界のどの国から人が来ているかを示すシールが貼られている場所がありました。その中で、ニュージーランドのシールが特に多かったことがとても印象に残っています。誰い国の出来事にも関心を持って足を運んでくださる方がいることを知り、高興にうれしく感じました。それと同時に、私たちもニュージーランドで迎えた大きな贈り物についてもっと知りたいと思うようになりました。」

「福島は、歴史や自然や町並みなど、素晴らしい景色や場所など、来客へのおもてなしが素晴らしいです。こうした現場を実際に見ると、福島という過去のイメージから脱するための努力を驚かされるほどの姿が見えます。だからこそ、皆さんにもいつか福島を訪れて自分の目で見ていただきたいです。興味を持っていただければ、福島でできることについて大きな力になります。実際に足を運んでいただければ、実際に感じることも大きくなります。福島とニュージーランドは、ともに地震の経験を持つ地域です。互いの経験を共有し、未来への備えを一緒に考えることは大きな意義があります。今回の研修がその一歩になれば幸いです。」

5日間のニュージーランド研修を終え、参加者たちは無事に帰国。震災を経験した自分たちのストーリーを海外で語り、世界に伝えたことへの感謝を伝えるという貴重な経験となりました。

Support Our Kids NZプロジェクト公式ウェブサイト



福島民友新聞

Support Our Kids ニュージーランドプログラムについて、2025年11月8日発行の福島民友新聞に掲載頂きました。

震災の経験や復興発信

本県出身者ら4人NZへ

本県出身の学生4人が、オーストラランド、ロトルア、ワイカトの3都市を訪れ、現地企業や自然を体験し、農業プレゼンテーションに参加した。...

「知見も広げたい」

「日本大震災から15年が経とうとしている今、私たちは、震災を自身の記憶として伝えることができる最後の世代です。伝えることの重要性や、判断の遅れがどれほど危険につながるのかわかる数回も、次の世代に伝えていくことが、自分たちの世代に与えられた責任だと考えています。そして、この責任は日本国内だけでなく、海外でも共有し、連携を求めたいと思っています。」

Tully's Coffee

支援企業のタリーズコーヒー・ジャパン様の社内広報及びWebサイトに取材記事を掲載頂きました。

東日本大震災被災児童自立支援プロジェクト

Support Our Kids

タリーズコーヒーでは、「タリーズジップス シングルサーブ オリジナルブレンド」などの売り上げの一部を東日本大震災被災児童自立支援プロジェクト「Support Our Kids」へ寄付しています。

これは「子ども達や青少年の成長を促すために、夢や目標のお手伝いをする」という経営理念の一つを元に始めた取り組みであり、パッケージの正面と裏面に掲載された「Support Our Kids」のロゴが印字になっています。

集まった寄付金は被災児童の海外ホームステイ資金等に使用されます。尚、このプロジェクトでは被災児童の海外での移動体験をサポートすることを目標としています。

Support Our Kids フェイスブックはこちら

Support   Our Kids 

